日本にもマンUを

川本裕子　早稲田大学教授

社会保障費の増大などを背景に「日本の欧州化」が懸念されている。
だが良い面での「欧州化」もある。サッカーはその一例だ。
経済が成熟した国で豊かさを感じるには、人々が熱中できる道具も必要になる。
欧州におけるサッカービジネスのあり方は、その良い手本になりうる。

経済の過熱化と野放図な支出の結果、金融システムに莫大な額の不良債権が生まれる。政府が問題を認知するのに時間がかかり、問題の抜本解決に乗り出すのにさらに時間を要し、その過程で景気後退に陥る。中央銀行の金融緩和頼りとなり、政策金利はゼロ、さらには大規模な資産購入などの量的緩和をおこなうものの、景気停滞からの脱却の見込みはなかなか立たない――。結局1980年代末のバブル崩壊以降に日本がたどったのと同じ軌跡をたどってしまうのではないか、という懸念から、欧州で「日本化」が恐れられている。

一方の日本では、世界的な景気の不透明感を受け、先行き不安が強まっている。また、中国や韓国との外交問題のこじれなどが新たな経済的リスクとして浮上した。消費税率引き上げ法案が成立する一方で、社会保障費の膨張を抑制し、働き手を増やす政策は見えない。社会保障費の増大、若年層の高失業率といえば、欧州が長きにわたって格闘してきた問題であり「日本の欧州化」も懸念されるところだ。日本では高齢者雇用の継続の義務化によって、若年層の雇用促進に赤信号がともり「欧州化」がさらに進む。一方で、欧州ではユーロ危機により、今や南欧諸国においてさえ財政再建や労働市場改革の取り組みが始まっている。下手をすれば日本は欧州化どころか、改革面で欧州に後れを取るかもしれない。

悪いところが似ているという話だけでは気が滅入（めい）る。良い面での欧州化はないものか。たとえば、欧州の名門サッカーチームに日本の若手有望選手が続々と移籍しているのが大きな話題だ。欧州はサッカー発祥の地であり、各クラブは地域のコミュニティーと一体化して人々の生活の中に溶け込んでいる。また国の代表チーム同士の試合は「戦争の代わりにサッカーをしている」というほど人々を熱狂させる。国民の娯楽の王様であり、暴走するファンが時折、社会問題化するほどだ。当然、経済にも大きな影響を与えている。

日本でもＪリーグの発展で、各地にプロチームができ、サッカーは人々の暮らしに根付き始めている。代表戦も頻繁に組まれ、特に若者の間では圧倒的な人気を誇る。日本もようやくサッカーでは世界の標準に近づいてきたのかもしれない。いい意味での「日本の欧州化」の一場面と言えそうだ。

サッカーは欧州では既にビッグ・ビジネスである。香川真司選手の新しい所属先、英イングランド・**プレミアリーグ**のマンチェスター・ユナイテッドは８月、ニューヨーク株式市場に上場した。時価総額は1700億円を超え、世界中にファン層を広げて広告収入だけでも年間 150億円、総収入は同 400億円を超える。プレミアリーグは商業化が行き過ぎだという批判もしばしば聞かれるが、莫大な投資によってスタジアムを整備し、観客数を増やし、かつては悪名高かったフーリガン（暴力的なファン）問題も管理できるようになったのは、まさに商業化の成果だろう。

日本では地域おこしの発想で自治体などもＪリーグに熱心に取り組んでいるし、世界レベルの選手を輩出している育成システムは長年の関係者の努力の賜物（たまもの）だが、まだまだサッカー専用のスタジアムは少ない。英国やドイツで毎週、巨大なスタジアムを満員にしてファンが集まり、試合を楽しんでいるのを見れば、日本の潜在的な市場規模はまだ大きいといえないか。資金調達や運営方法など、企業的な手法を一層強化したり、逆に地域住民の主体性をもっと活用したり、国内に活動を限定せず夢は大きく持って取り組んではどうか。

すなわち経済・生活の水準が一定レベルに達した成熟国において、人々が豊かさを感じながら生活していく上では、人々が熱中できる道具立てがいろいろと必要、ということをもっと考えてもよいのではないかということだ。それによって新たなビジネスや投資も生まれてくる。もちろんサッカーに限らない。ツール・ド・フランスに代表される自転車ロードレース、アメリカズカップなどで有名なヨット、ボートやトライアスロンなどは、先進国の比重の高い成熟型スポーツだろう。スポーツに限る必要もない。その意味で欧州は日本の今後を指し示す点が多い。

野田佳彦首相はロンドン五輪の開会式への出席を野党の反対で取りやめた。ドイツのメルケル首相はサッカーの代表戦であれ、国内リーグ（ブンデスリーガ）であれ、よくスタジアムで観戦している姿がテレビで放映されている。ユーロ問題など激務の中、多分本当にサッカーが好きなのだろう。サッカーでも野球でも大相撲でも、競技場に出向いて、国民とともに心からスポーツ観戦を楽しむ首相の姿が見られれば、いい意味での「日本の欧州化」の第一歩かもしれない。

関連ニュース
2012年８月11日付日本経済新聞朝刊９面

サッカーのイングランド・プレミアリーグの名門、マンチェスター・ユナイテッド（マンU）が10日、ニューヨーク証券取引所に上場した。初値は 14.05ドルと、公開価格（14ドル）をわずかに上回った。マンUは２億3300万ドル（約 184億円）の資金を調達。調査会社トムソン・ロイターによれば、スポーツチーム・団体の調達額としてはイタリアのサッカークラブ、ユベントスなどをしのぎ過去最大になる。

[redacted]

キーワード

■**プレミアリーグ**　イングランドのプロサッカーで最上位のリーグ。現在は英金融大手バークレイズがスポンサーとなっており、ウェールズの１チームを含む合計20チームが所属している。世界中で試合がテレビ放映され、サッカーに限らず全世界のスポーツリーグの中で最もテレビ視聴者が多い。そのためドイツやスペイン、イタリアなど他の欧州主要リーグと比べても圧倒的な資金力を誇っている。

かわもと・ゆうこ　1982年（昭和57年）東大文学部社会心理学科卒、東京銀行（現三菱東京ＵＦＪ銀行）入行。88年英オックスフォード大大学院経済学修士修了。マッキンゼー・アンド・カンパニー東京支社、同パリ支社を経て2004年から現職。ヤマハ発動機社外取締役、東京海上ホールディングス社外監査役なども務める。